

観点別評価との融合				
	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
	情報や情報社会に関心をもち、身のまわりの問題を解決するために、自ら進んで情報及び情報技術を活用し、社会の情報化の進展に主体的に対応しようとする。	情報や情報社会における身のまわりの問題を解決するために、情報に関する科学的な見方や考え方を活かすとともに情報モラルを踏まえて、思考を深め、適切に判断し表現している。	情報及び情報技術を活用するための基礎的・基本的な技能を身に付け、目的に応じて情報及び情報技術を適切に扱っている。	情報及び情報技術を活用するための基礎的・基本的な知識を身に付け、社会における情報及び情報技術の意義や役割を理解している。
授業プリント作成	◎	○	○	○
基本操作実習	○	○	◎	○
作品・実技テスト	○	◎	○	○
考查	○	○	○	◎

図3 観点別評価との融合 参考文献(1)

観点別の満点			
<ul style="list-style-type: none"> 各観点ごとに平均する。 結果を「掛け算」して評価の基礎資料とする 			
①授業 30回	②作品 6~7回	③実習 30回	④考查 3回
0~3	0~4	0~5	0~100
<ul style="list-style-type: none"> 評価の基礎資料(0~6000) = 授業 × 作業 × 作品 × 考查 			

図4 観点別の満点

6. 実践のまとめとして

この評価を取り入れて、良かった点をあげてみると次の通りとなる。

- すべての活動を評価に取り入れられる。
- 評価自体は単純化できる。
- 成績が悪かった場合、どの部分が悪いと明確に指摘できる。(指導に結びつけられる)

10年ほど実施しているが、教員側が普段授業していて想定している評価と同じ結果になり、生徒もほぼ納得している様子である。

7. 観点・評価・評定について

観点・評価・評定について次のように考えている。

- 学習状況の観点の間は独立している
- 評価を総括したものが評定
 - 評価を足し算・・・観点の独立性が薄れる
 - 評価を掛け算・・・独立性を保って評定化できる

この<掛け算>による総括の方法は、評価の

立体(4観点なので超立体)の大きさを元に評定を導き出していると考えている。

問題点として次のようなものがあげられる。

- 観点間の重みづけとその整合性
- 5段階に直すときの分かれ目が正しいか。
 - このあたりは、微妙な教員のさじ加減といった部分もある。時々調整は必要であるとする。

8. 他教科への適用

本来の観点別評価とは大きく離れてしまうことをおそれずに、元の担当科目である理科にあてはめて考察してみるとつぎのようになる。

関心・意欲・態度・・・普段の授業
 思考・判断・・・実験などのレポート
 観察・実験の技術・表現・・・実験態度・技術
 知識・理解・・・考查、小テスト

いままで、足していた部分を掛けてみると別の資料ができていく。どちらの方法が良いかは結果をみて判断すればよい。情報以外の教科にも適用できる可能性がある。

また、新たな見取りの観点として出席が大切であると考えられる場合は欠席・遅刻なども観点の一つとして取り入れることも可能であろう。いずれにしても、どのような生徒に「5」をつけたいかという明確な形があり、それを見取るために評価の観点(規準)や評価基準を設定していく必要があると考える。

9. さいごに

情報の授業を担当するようになり、評価や評定について、考える機会を得た。ただ、この方法を導き出すに当たり文献や研究を参考にしていないため、現段階では「観点別学習状況の評価」、「評価を総括して評定にする方法」のローカル解の一つと考えている。

まだまだ評価・評定について考える必要があり、この評定化の方法についても未だ改善の必要がある。諸生方のご批判・ご指導・ご指摘いただければ幸いである。

参考文献

- (1) 各教科の評価の観点及びその趣旨(2010年)

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/nc/_ics/Files/afieldfile/2010/05/13/1292899_2.pdf